2017年度博士学位論文審査報告

博士学位論文申請者　　**玉腰　和典**

愛知県立大学大学院人間発達学研究科博士後期課程（2013年度入学）

博士学位申請論文題目

体育科教育における戦術・技術認識の形成過程に関する研究

博士専攻分野の名称　博士（人間発達学）

審査担当者　主査　教　授　山本　理絵
副査　教　授　石田　智巳（立命館大学）
副査　教　授　岩田　靖　（信州大学）
副査　教　授　湯　海鵬
副査　教　授　丸山　真司

＜論文審査の要旨＞

１．研究の問題意識と目的について

体育科教育における認識に関する研究、とりわけ、学習者の認識形成過程を解明していくことは，学習者の認識形成の段階を評価したり，発展段階を意識した指導方法や指導プログラムを開発したりすることができ，わかってできる体育授業づくりに寄与する。特に体育科教育においては運動学習を中心としたカリキュラムによって，主な認識対象が戦術や運動技術となっていることから，戦術・技術認識の形成過程を解明することが求められているとの問題意識に基づいて、関連先行研究が少ない分野である本研究に取り組まれている。

本研究においては，戦後体育科教育における運動学習に関連する認識的側面の位置づけや認識形成を重視する体育実践研究の動向を検討した上で，戦術・技術認識の構造的特徴を解明し，それらを分析枠組みとして，学習者の認識形成過程の特徴を解明することを目的としている。本論文は，第１章「戦後学習指導要領における運動学習に関連する認識的側面の位置づけ」，第２章「戦後体育科教育における認識形成を重視した実践的研究の動向」，第３章「体育科教育における戦術・技術認識の構造的特徴に関する考察」，第４章「小学校高学年の戦術・技術認識の形成過程に関する事例研究」，そしてこれらの成果と課題を提起する終章で構成されている。

２．本研究の成果

（１）戦後体育科教育における認識に関する位置づけや体育実践研究の動向

わが国の戦後学習指導要領における運動学習に関連する認識に関する研究を歴史的に検討した結果，体育科教育における認識に関する研究は，近年になってようやく重要課題として位置づけられたのであり，これまでの体育科教育に

おける認識に関する議論は，認識それ自体が問題とされるのではなく，運動技能との関連や集団形成との関連をどのように把握するかに関心があったこと，特に，その多くは教師の指導を想定した研究となっており，学習者の認識活動やその形成プロセスにアプローチする研究は不十分となっていることが明らかにされた。

（２）体育科教育における戦術・技術に関する認識対象の構造的特徴

本研究においては，学習者の認識の実態を分析する枠組みを構築するために，客体としての認識に関する研究領域の内，これまで曖昧にされていた，戦術・技術に関する認識対象の構造的な特徴を解明している。そこでは，体育科教育における授業実践レベルで問題となる認識対象を検討した数少ない先行研究として岩田や石田の研究の到達点を概観した上で，両者の研究は認識対象となる戦術や運動技術の階層関係についての言及が不十分であることを提起し，その問題点を解消するためにスポーツ運動学の知見を参照しながら，戦術や運動技術に関する認識対象の構造的特徴について考察している。考察の結果，最上位には教師が単元において形成させたい体系的な認識が位置づけられ，単元の各授業において，教師が目標とする認識対象は課題―実態―方法の３つの側面が存在し，これらが戦術や運動技術の各階層（戦略―戦術―運動技術）に位置づいた構造をもつことが明らかにされた。またその構造的な特徴をモデル化して提示することができた。

（３）体育授業における戦術・技術認識の形成過程

上記の構造に基づいて、実際の体育授業において，主体の認識に関する研究領域の内，戦術・技術認識の形成過程を解明しようとしている。方法としては，「実態，課題，方法」の３つを分析枠組みの手がかりとしながら，体育授業で収集された感想文を分析している。これまで，体育科教育における認識に関する研究は，研究方法論上の課題を抱えていたが，本研究においては，理論からの演繹と感想文分析による帰納による分析を手続きとして，「課題に関する実態，方法に関する実態，課題，方法」の４つのカテゴリーへと再構築し，学習者の認識の実態を把握するための分析枠組みを構築することができた。

本研究では，構築した分析カテゴリーを使用し，小学校高学年のフラッグフットボールを分析対象として，学習者の認識形成過程の特徴を分析した結果，単元の前半と後半の学習課題の変化にともなって，実態，課題，方法の３つの認識対象の関係性は変化していることが明らかとなった。また，上位グループと下位グループの相違点としては，上位グループの方が，多様な認識対象が相互に関連づけられていた。そのことから，認識対象が相互に関連し，結びついているかどうかが認識形成の段階の指標となることが示唆された。

また，本研究では，上位グループにおいて認識活動をリードした学習者に焦点をあて，「実態，課題，方法」の３つの認識対象の関係性や，認識対象の相互の結びつきの段階，そして，認識形成過程のサイクリックな関係を考察してい

る。その結果、３つの認識対象の関連性は，常に「課題」から出発して，「方法」の修正がなされていたことから，３つの認識対象のうち，学習者の認識を体系づける最も基底的なものが課題認識であることが示唆された。さらに，「実態」は，学習者の「課題」や「方法」を発見・推測したり，具体的な事実によって実施した方法が有効かどうか検証したりしていく関係にあり，「実態」は「課題」と「方法」を相互に結びつけたり，「課題」や「方法」の修正を要求したりしていくことで，認識形成過程のサイクリックな関係をつくりだしていくことが明らかとなった。

３．本研究の意義と課題

本研究においては，体育科教育において授業実践レベルで問題となる認識対象を研究した岩田や石田の研究を発展させ，より構造的に授業構想における認識対象の特徴を解明し，戦術・技術に関する認識対象の階層的構造モデルを提起した。そして，これまで実証的な分析が十分になされてこなかった認識形成過程を，この構造に基づいて具体的な体育授業において実証的に検討し，「実態，課題，方法」のサイクリックな関係を解明した点に独創性が認められる。この研究成果は，本研究が再構築した分析枠組みが今後体育科教育における戦術・技術認識の実態を分析するツールとなる可能性をもつこと，および体育授業において認識の高まりを把握する１つの指標を提起することにおいて意義がある。

しかし，本研究が解明した戦術・技術に関する認識対象の階層的構造モデルを体育実践へと適用するためには，多様な実践群を分析することによって，モデルのさらなる精緻化をめざしていく必要がある。また，近年においては，他者との協同的な学びの重要性が強調されており，学習集団形成や他者との認識交流との関係で学習者の認識形成過程を分析することも重要な研究課題となる。諸外国の研究成果にも学びながら、さらに認識形成に関する研究を進めていくことが期待される。

以上から，本審査委員会における審査の結果，本論文が愛知県立大学博士（人間発達学）の学位授与に相応しい水準にあると全員一致で判断し，合格とする。